RIPPLE SAILING CLUB
NO. 145

月刊 1995. 05. 26

RIPPLE

（発行）
リプル・セイリングクラブ
〒238−03
神奈川県横須賀市長井2−11−1
TEL 0468−57−1711

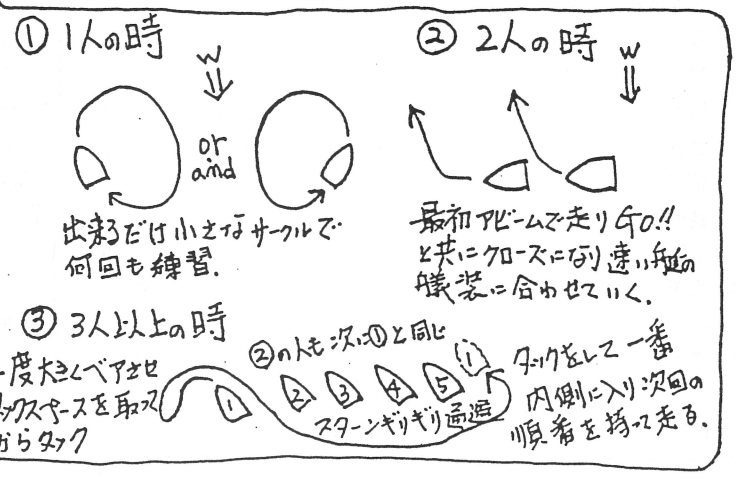
ヨット駅伝は 6月4日(日)です.

来る6月4日（日）恒例になっております、ヨット駅伝がここ長浜で行われます。
海上に設けられた3個のマークを、参加者4人プラス女性1名で回ってくるというもので、優勝チームには、ヤマハよりミニバイクがもらえるというチームレースです。
もちろん各コース毎に区間優勝が設けられていて、それなりの賞品が用意されています。
スタートは10時ですが、スキッパーズミーティングは9時半です。
参加者を募集中ですので、ふるってご参加を！！。

たまには 練習もしょうぜ.

なんか天候の関係でここ長浜では、今年になって正式なレースが行われておりません。
もちろんリプルカップも例外では有りません。
そこでレースの無いときには、レースの練習をしてみたらどうでしょうか？
まず1人での練習ではサークリングという練習が有ります。
これは、右回り、そして左回りで一人でぐるぐる回るものです。
サークルをできるだけ小さくしてその場で回るのですが、その場面場面でセイルをシェイプするのはもちろんですが、加えてセンターボード、カニンガム、バング等も行うものです。
まー、言ってみたら帆走基礎訓練とでも言いましょうか、よく耳にする”あそこでタックを失敗しちゃってさー！”なんて言うことが無くなるまで体で覚え込んでいくのです。
そして、仲間が2人の時は”ベアーチューニング”という練習方法が有ります。
これは先ず、陸上で同じチューニングをしておき、海上に出たらあまり距離を離さないアビームで2人共走っていて、”5、4、3、2、1、”とかけ声をかけていき、”GO！”で2人共クローズホールドになるのです。
そして一人がより良いと思われるバングなり、カニンガムなりのチューニングを行い、上り角度、ボートスピードを比べて走るのです。
良ければその通りに2人共チューニングを合わせ、そして幾度となく走り比べ、より良いチューニングを見つけ、体で覚えていくのです。
波の状態、風の状態、無限とも思われるこの組合せが有るのですが、この時はこれが良いんだな、というものを短期間に憶えられて大変良い練習方法だと思います。
また3人以上になったら2人の時と同じように、アビームからクローズになり、がんがん上らせて行き、一番外側の（風向に対して左の人）が一番内側に入り込むという練習です。
入り方ですが、一番外側になった人は一度ベアさせ、十分なタックを出来るスペース確保してからタックを行い、仲間のスターンぎりぎりで一番中側まで行ったら、もう一度タックをして皆と同じに走って行くのです。
そしてこれを何回も何回も繰り返すのです。
これは、遅い人が出ても、一周すれば遅い人に隊列が並び、おーい待ってくれーなんて言うことが無いばかりか、艇と艇の間隔を狭めれば、正にビックフリートのレースをしているようで、なかなかの迫力も楽しめます。
ただ走っているだけでは飽きちゃった。なんて言う人は仲間を誘ってこんな練習をしてみてはどうでしょうか。

リプルカップ前半最終戦は 6月14日(日)です

アメリカズカップから かま見るヨット事情

ジュール・ベルヌ杯という無寄港世界一周レースというものをご存じでしょうか。
ホイットブレッドも世界一周レースですが、ジュール・ベルヌ杯はクラスはどうの、艇の大きさはどうのなんて関係なく、どんな大きな、そしてどんな形のヨットでも、とにかく世界を一周して来ればOK！という単純明快なヨットレースなのである。
昨年の大会では”ENZA”号に乗り込んで、スキッパーを務め、みごと新記録の74日という驚異的な時間で回ってきてしまった男がニュージーランドの英雄”ピーター・ブレイク”なのである。
マックススピード29．2ノット、平均速度14．6ノット、赤道もあれば氷山も有り、なにせ低気圧を目指して走って行くという何でも有りのレースなのである。
その英雄”ピーター・ブレイク”でさえもあのアメリカズカップでは、なんとグラインダー役なのであるから、チーム・ニュージーランドがカップを持って行ってしまうのは、当然といえば当然なのかもしれない。
しかし、それにはそれなりの土壌がしっかりと有るんですね。
ニュージーランドにはいくつものヨットクラブが点在していますが、つとに有名なのが北島のオークランドである。
人口約100万人、なんとその内4人に1人が艇のオーナーなのであるから驚きである。
街の別名が（City of Sail）。
オーナー以外のクルーも含めれば、マリンレジャーを楽しんでいる人口は計り知れないものがある。
それは、公的な、セイリングに対しての理解度もかなりなものがあり、平均年収200万円の彼らでも、悠々と楽しんだり、レッスンを受けられる環境を作りだしているからなのである。
現にチーム・ニュージーランドのスポンサーはTOYOTAは別にして、TVNZ、ロットはれっきとした公営企業なのであり、これらを見ても国を挙げて海洋レジャーに真剣に取り組んでいる姿が見えてきて、エンザ号の驚異的な優勝や、アメリカズカップの奪取などしごく当然な結果だったに違いない。
どこかの国のように、公的なハーバーの保管料が年間約100万円したり、寄港する度に一番へんぴな所にもやわされたり、漁港の一角に専用スロープを設けることなんか、ハルマゲドンが有ったってNo！であったり、やれ、船検だ、船舶免許だ、牽引するのにどうたらこうたらとえらい違いである。
まだまだ日の浅い我が国の海洋レジャー、層の厚いものにして行きたいと思いますね。